

たばこによる害を訴え続けている医師夫婦が尼崎市にいます。話し始めると息もつかせぬしゃべりの妻と、ちくりと突っ込む夫。23日に「ぴんぴんピンク」のコンビ名で夫婦漫才よろしく、掛け合いの講演に挑む。

尼崎の医師夫妻

夫婦漫才風に講演

2011年
10月17日

よろしな～

禁煙でピンクの肺



禁煙を呼びかける「ぴんぴんピンク」の菌夫妻。健康な肺のピンク色が好きで、服や小物をそろえる

利用して各地の病院を回り、院内禁煙を関係者が集まる会議の場などで訴えてきた。「当初は煙たがられていたが、同志がいたおかげで1足す1の活動が2でなく、3になった」と出会いを振り返る。

潤さんは、病院などの公共施設内での禁煙を広める活動が評価され、世界保健機関(WHO)から2007年に「世界禁煙デー賞」を受けた。

ピンク色がなかったのが赤色だけど、愛車のボディには「タバコのない社会を」との大きなステッカーを張る。

一緒に会議に出る時はピンクのペアルック。2人で掛け合いで講演するのは今回が3回目になる。「楽しく盛り上がったやれば、多くの人の心に残る」

23日の講演会は午後2時から西宮市池開町の武庫川女子大で。「女性の宿敵 タバコの真実」と題し、スライドを見せながら、ユーモアを交えて話す。「私たちの一生懸命な姿が伝われば」と菌夫妻。

無料。申し込みは市保健所(0798・26・3667)へ。(五十嵐聖士郎)

妻「女の人は痩せられるからといって、たばこを吸う人がいるけど」

夫「あなたのその体で言っても説得力ないわ」

禁煙外来クリニックを大阪府豊中市で開く妻の菌ははじめさん(51)は、年に50回の講演をこなし、ピンク一色のいでたちで訴える。夫で西宮市保健所長の潤さん(62)も、10年前に結婚してからは毎日、ピンクのシャツで出勤。

たばこを吸っていない健康なピンク色の肺が好きだからと、服もカバンも携帯電話も

ピンクで統一。家に帰れば冷蔵庫だってカーテンだってピンク色だ。

妻のはじめさんは17年前に医師になり、勤めた最初の病院での内科患者のほとんどがたばこを吸っていたり、副流煙を吸ったりしている状況にショックを受けた。少しでも命の危険を回避させることが医師の務めだと信じ、禁煙運動をライフワークに決めた。

しばらくして、神戸市の病院に当時勤め、院内禁煙に取り組んでいた潤さんと知り合った。2人はその後、休みを